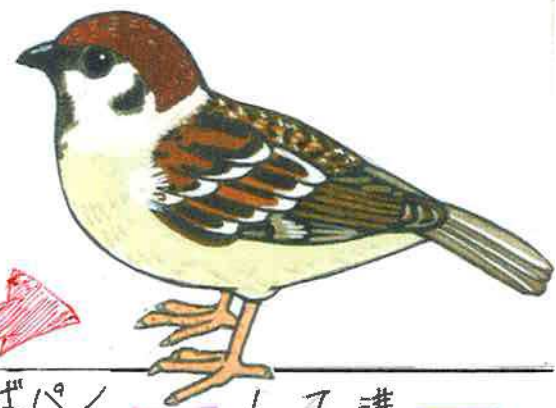




スズメ

朝田舞



動機

私は夏休みの間に、弱て

溝でもがいていた子スズメを保護しました。そして、スズメについてとても興味を持ったので、かわらばんにまとめることにしました。

スズメとは

スズメは、世界に広

く分布している鳥です。日本にいるスズメはヨーロッパでは森で生活しており、「ツリースパロウ」と呼ばれています。

まず、色についてです。スズメという地味で茶色い鳥というイメージがあるかもしれませんが、しかしよく見るとその背中ほとんど複雑な模様を

していることが分かります。江戸時代にはこの装いが好まれ、スズメの色といふのは着物の色の基本にも使われたくらいです。

体の大きさは4.5cmほど、重さは25gほどです。私が保護したスズメを触ったとき、体がとても温かいことに驚きました。調べてみると、鳥の体温は40度くらいだそうです。

スズメの抱卵の工夫
スズメの抱卵にはいくつかの工夫があります。卵を産んだ母鳥がなかなか抱卵を始めないこともその一つです。すぐに抱卵を始めてしまうと、先に産んだ卵からヒナが孵ってしまう他の卵をうっかりつぶしてしまつかも恐れられます。また、先に孵ってエサをもらいはじめた体が大きいヒナとあとから孵ったばかりの小さいヒナがいたら小さいヒナはエサをうまくもらえなくなるかもしれません。だから、全部の卵を産み終えてから母鳥は卵を温め始めます。温めるのにも工夫があります。スズメに限らず多くの鳥類は、卵を

抱くために母親のおなかの羽が抜け落ちます。羽毛があると体温が卵に伝わりにくくなるからです。このように、スズメは卵を無事に孵すためにたくましく工夫をしているのです。



子育ては大忙がし!!

ヒナを育てることを育雛、ヒナが巣立ちするまでの期間を育雛期といいます。スズメの育雛の作業はヒナをあたためることを餌を与えることとあり、期間はおよそ14日間です。餌は、ほとんどもがやみちなど昆虫やその幼虫です。一日に餌を運ぶ回数は、オスとメス合わせて一日が約100回、二日目が約120回、10日目が400回。14日間合計4000回を越える餌運びです。

スズメの生息する場所

スズメは人が住んでいるところに生息します。普通、鳥や動物は人がいるのを嫌がります。ところがスズメが人のそばにいる理由だと考えられています。つまり、スズメは人がいることを利用してカラスやタカ、イタチ、ヘビなどから襲われないようにしているのです。スズメは屋根瓦の下、配管の中、道路の標識などの人工物に巣を作ることも多いです。注意深く探してみると、いろいろなところに巣が作られているのが見つけられると思います。

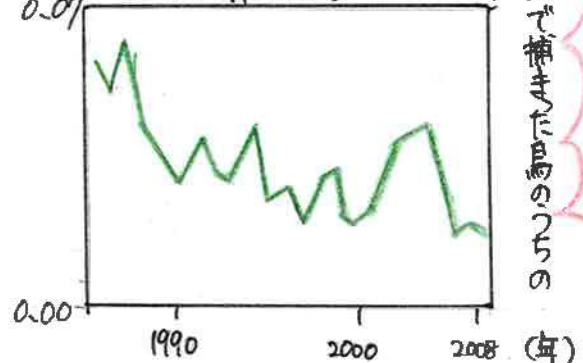


スズメ撲滅作戦!?

1950年代の半ば、中国で人間の生活に害を及ぼすハエカ、ネズミ、スズメの4種類の生き物を撲滅する「四害追放運動」が起こりました。スズメは、人間の米や穀物を食べる「害鳥」とされたために四害のひとつとされました。スズメは繁殖のための巣を取りのぞいたり、群れを追いかけて最後は疲れ果てて飛べなくなるところを捕らえるという方法で徹底的に駆除されていきました。こうして捕らえられたスズメの数は、北京近郊だけでも1億羽にもなりました。ところが、その後中が凶作に見舞われ、その原因のひとつとして、それまで作物に寄生した害虫を食べていたスズメが減ったために害虫が増えました。ことが明らかになった後、60年代にスズメは四害の対象から除かれ、その代わりにナンキンムシが新たに加えられたそうです。

スズメが減っています!!

左下のグラフは、標識調査で捕まえた鳥のつちのスズメの割合です。数が年々減少していることが分かります。理由は何説もあり、エサやエサをとる環境の減少によるスズメの少子化が起きていることやスズメが巣を作る環境の減少が考えられています。また、まだ数が十分にいることなどから、絶滅の心配は今のところそんなにはありません。しかし、スズメが減ることによって生態系にもたらされる影響は決して小さくはないと思います。スズメが生きていける環境を残し、守ってあげたいと思います。



スズメと他の生き物との関係



まとめ

姫路市を拠点に活動されている版画家の岩田健三郎さんは、作品の中にスズメをたくさん登場させています。以前お会いした時に、スズメは身近すぎて研究している人がほとんどいないと話されていました。数の減少は今ほそれほど深刻ではありませんが、生態系に及ぼす影響などを考えるときスズメが生息できる環境を残すことが必要なのだと強く感じました。